

氏 名 や の さ と じ
矢 野 智 司
学位(専攻分野) 博 士 (教 育 学)
学位記番号 論 教 博 第 125 号
学位授与の日付 平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目 贈与と交換の教育人間学
——漱石と賢治における贈与=死のレッスン——

論文調査委員 (主 査)
教 授 田 中 毎 実 教 授 辻 本 雅 史 助 教 授 齋 藤 直 子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、おもに夏目漱石と宮沢賢治の作品を手がかりにして、純粹贈与、死、蕩尽、供犠、歓待、遊戯などの出来事がどのように生成変容を生起させるのかについて、教育人間学的な探究がなされている。

第Ⅰ部「贈与する先生と受け取る弟子」では、純粹贈与者としての「最初の先生」の誕生と死、先生からの贈与を受け取る弟子の変容から、先生-弟子関係が捉えられている。

第1章「贈与する先生の誕生とその死—教育の起源をめぐるもうひとつの物語」では、教育の起源である「最初の先生」の誕生が原理的に問われている。最初の先生のモデルは、贈与によって弟子たちに共同体の外部を垣間見させる「ソクラテス」という名の純粹贈与者である。第2章「先生と弟子の物語としての『こころ』—死と贈与のレッスン」では、漱石の小説『こころ』における「先生」を純粹贈与者として読み解き、先生と贈与を受け取る弟子という関係のダイナミックスが考察されている。第3章「『先生』としての漱石—師弟関係における贈与と負債」では、純粹贈与者としての漱石自身と弟子たちとの関係、そして漱石の死による弟子たちへの贈与が考察されている。第4章「贈与・死・エロスにおける先生と弟子—第Ⅰ部のまとめに代えて」では、先生と弟子との関係が、贈与・死・エロスをキーワードとしてまとめられている。

第Ⅱ部「贈与と交換を体験する子ども」では、他者と異界に焦点づけた賢治童話の検討を通じて、子どもの「体験としての贈与」と「経験としての交換」の関係が考察され、さらに「贈与」という出来事を語る「心象スケッチ」という賢治固有の技法が解明されている。

第5章「子どもの前に他者が現れるとき—生成する物語としての賢治童話」では、『種山ヶ原』を手がかりに、子どもの生の変容における—交換する社会的他者から純粹贈与者に至るまでの—多様な他者との多次元の関わりが解明されている。第6章「異界が子どもを引き寄せるとき—生の技法としての賢治の逆擬人法」では、『タネりはたしかにいちにち噛んでみたやうだった』を手がかりに、「逆擬人法」という描写と生の技法に着目しながら、子どもと異界との関わりが論じられている。第7章「交換の物語と交換の環を破壊する贈与—語りえぬ贈与の語り方」では、『貝の火』を手がかりに、贈与を物語ることの可能性と不可能性が論じられている。第8章「生命の倫理としての贈与と心象スケッチ—第Ⅱ部のまとめに代えて」では、賢治の作品における贈与と賢治自身の生における贈与との関連、そして贈与と心象スケッチとの内在的關係が解明され、さらに『なめとこ山の熊』を手がかりにして、純粹贈与の成立可能性、さらには「教育問題」を語る上での心象スケッチの意義が論じられている。

第Ⅲ部「贈与と交換とがせめぎ合う教育の場所」では、「社会化」や「発達」を中核概念として構築されてきた戦後教育学の教育的-教育学的マトリクスには位置づけることのできない、贈与など生成に関わる教育の出来事が解明されている。従来の「発達としての教育」に対して「生成としての教育」を際立たせるとすれば、後者は前者を補完したり否定したりはせず、むしろ前者を侵犯する。後者を、前者を論じるのと同じ用語、同じ文法、同じレトリック、同じスタイルで語ることはできない。このような前提から、贈与と交換とが教育の日常においてどのように動的に関連しているかが、解明されている。

第9章「生成と発達の間としての学校—生成としての教育の教育学的位置」では、発達としての教育と生成としての教育の学校教育におけるありようが、戦後教育（学）の分析を通して解明されている。第10章「純粹贈与としてのボランティア活動体験—贈与と交換がせめぎ合う場所」では、「ボランティア活動体験の義務化」を手がかりにして、交換に基づくボランティア理論に対抗させて、純粹贈与を根拠とするボランティアの理論と活動の可能性が論じられている。第11章「羞恥のマナーから歓待のマナーへ—歴史的課題としての贈与に基づくマナー」では、交換としてのマナー教育から、生成の様式としての歓待=純粹贈与としてのマナー教育への転回の可能性が論じられている。第12章「限界への教育学という運動—第Ⅲ部のまとめに代えて」では、贈与と教育学との関係に関わる問題点があらためて整理され論じられている。

終章「死のレッスンと個人の生成—純粹贈与による教育の転回」では、本論文での論の語られ方が、あらためて方法論的に問いただされている。さらに、共同体における教育の起源を死者への負い目を中心に捉え直し、そのような死者への負い目に基づくホーリズムの教育に抗して、「個人」を出現させるのに不可欠な「死のレッスン」をもたらすものとして、純粹贈与者としての「最初の先生」が論じられている。

著者によれば、日本の戦後教育学は労働を経験のモデルとする教育思想に大きな影響を受けてきた。しかし、生の変容は、経験として自分のなかに取り込んでいけるようなものばかりであるわけではない。たとえば、死を通して、私たちは、非-知の体験をする。そのとき、私たちは、世界との境界線を失い、世界との連続性を体験する。死の体験とは、このような連続性を体験する溶解体験である。死にいたる体験は、蕩尽やエロティシズムや供犠の体験でもある。人は、死に触れることによってはじめて、「ほんとうに」生きることができる。「ほんとうは何か」と問うことは、損得をめぐる交換の原理を括弧に入れることである。このとき、人は、共同体の道徳とは別の「みんなのほんとうの幸い」を求め続けるという生命の倫理に開かれる。純粹贈与は、死の体験をもたらす他者への倫理を開く出来事であり、交換に基づく共同体の道徳を乗り越える教養である。共同体の道徳を超えた倫理は、「歓待」にみられるように、見返りを期待できるために助けるのではなく、他者ゆえに手をさしのべる。歓待もまた純粹贈与である。純粹贈与の極限の形態は自己の贈与的な死である。「最初の先生」とは、このような純粹贈与によって贈与の連鎖を立ち上げる人のことをいう。

教育学は、学問として自己を象る過程において、以上のような非-知の体験ともいべき「言葉によって言い表すことの困難な出来事」を、非-教育的あるいは反-教育的なるものとして排除してきた。あるいは、その出来事の手を縮減し教育の物語に回収することによって、自己の学問的な枠組みを強固にしてきた。著者によれば「贈与の教育人間学」は、このような回収や排除を超えて、教育の理論を根底的に再生させる思想的な試みなのである。

論文審査の結果の要旨

これまでの教育学は、その根底に「交換」が潜む「人間」・「社会」・「労働」・「経験」・「発達」などの基礎的諸概念によって、構成されてきた。本論文は、教育学のこの存立基盤そのものを問い直し、「発達としての教育を侵犯する生成としての教育の可能性」を開こうとする。野心的な試みである。本論文は、在来の理論の疎通可能性が他者との論の交換可能性にみられてきたこと、まさにそのことを、問いただしている。理論の在来の疎通可能性を超えた疎通の可能性—著者のことばでは「物語に回収されない語り」の可能性—は、「贈与の連鎖」による生成的理解の共同性を現出させることによってのみ可能となる。しかしこの現出は、きわめて困難な理論的課題である。著者が、小説や詩などの文学作品を手がかりにしたのは、著者の資質の強い不可避性によるというよりも、むしろこの方法論的難問に応えるためであると考えべきである。

本論文では、漱石と賢治の作品分析を手がかりにして「贈与と交換の教育人間学」が展開されている。本論文は漱石や賢治などの膨大な小説、日記、書簡、詩、童話や関連する二次文献などを収集し整理し綿密に読み、しかもこれらすべてを議論展開の力として巧妙に用立てた力業である。

むつかしい主題をめぐるやっかいな議論が展開されているが、文章は総じて良くこなれている。論の展開はスリリングで冒険にみちており、これをたどるにつれて、論のきわまるところが鮮やかに浮かび上がってくる。この労作の長大さにもかかわらず、明快な叙述のすべてが緊密に結びあって一つの世界を織りなしている。

著者は本論文によって、自身の理論を「コミュニケーションの教育人間学」—すなわち、システム内部におけるパラドックスがもたらす非連続的跳躍による生成に関する理論—から、「贈与の教育人間学」—すなわち、システム外部の体験がも

たらず生成に関する理論へと展開させた。この展開は理論的な拡張であり深化でもあるが、これによって著者の理論は、既存の教育理論の根底的批判を遂行するとともに、既存の理論の極限的に可能な展開のありかたを示すことにもなった。この意味では、本論文の議論の中核は、教育学の正統な文脈のうちにある。

たしかに、「贈与の教育人間学」という主題は、新奇である。さらに、在来の教育学の基礎的諸概念である交換、有用性、機能性、発達などに対抗して、バタイユや作田啓一らの用いる供儀、贈与、溶解体験などの概念が教育理論の世界に持ち込まれ、あらためて死、体験、生成、自己変容などが強調されている。著者が15年以上も前からはじめたこれらの試みは、教育の理論にとってはいまだに新鮮であり続けている。加えて、本論文では、安易な理論的疎通可能性を峻拒して新たな理論的疎通可能性を開くべく、「心象スケッチ」(賢治)、「則天去私」(漱石)、「死のレッスン」(ソクラテス)、「出来事」などの概念が新たに解釈し直され援用されるとともに、「逆擬人法」などの方法論的にも有効な新たな概念も提起されている。これらすべては、たしかに目新しい。しかし、これらによって浮かび上がる「生成の教育学」ないし「生命の教育学」は、けっして奇矯なものではなく、むしろ、教育理論のオーソドックスな流れに潜在している可能性を意図的にとりだし展開したものと評価することができる。

「生成の教育学」は、著者自身が指摘しているように、仏教の生命観、わけても我が国の大乘仏教に固有の本覚思想などとの関連が強く、さらにいえば本論でたびたび引用される西田幾多郎、田邊元など京都学派の生命論に根ざした無の理論とも強く親縁である。いいかえれば、「生成の教育学」は、今日までに「哲学工房」としての京都学派の枠内で教育理論を構築しようとしてきた木村素衛、森昭、和田修二などの志を正統に継承する理論的試みである。さらに、「生成の教育学」は、その初心においてボルノウなどドイツの伝統的な精神科学的教育学の理論構成をペイトソンなどのパラドックス論を手がかりに超えようとしてきた著者の試みの集大成であるが、このような理論展開はかえって、精神科学的教育学の生命論的基盤に回帰するものであるかのようにもみえる。さらに、最近の教育理論の一部にみられる風潮に反して、「生成の教育学」は、教育的日常性を無視するのではなく、その構造の徹底的な解明に向かっている。

著者は、伝統的な教育学に対して「オルターナティブな教育(学)を」「対置する」のではなく、「いまある教育の営みのなかに働いている贈与や供儀といった不可視の秩序侵犯の力を看取する感受性の感度を高め」、「教育的-教育学的マトリクス上に教育ならざる次元を呼びだす教育学の言葉の創造を模索する」ことによって、「教育的-教育学的マトリクス自体を宙吊りにする限界への教育学を試行する」と述べている。今一度繰り返すなら、「生成の教育学」ないし「生命の教育学」は、けっして奇矯な提唱ではない。それはむしろ、教育理論のオーソドックスな流れのうちに潜在してきた可能性を意図的に取り出し、これを十全に実現させようとするものと評価することができるのである。「生成の教育学」は、教育理論の伝統的流れに属しながら、「発達の教育学」の制約をうち破ることによって、教育理論自体を根底から再生させようとする。教育の理論にとっては、きわめて貴重で重大な仕事であると評価しなければならない。

たしかに、「発達の教育学」に対する「生成の教育学」という立論の仕方は、「発達」から「生成」を際立たせることによって、結果的に「発達」と「生成」の双方をともに概念的に貧困化させてしまうかもしれない。さらに、本論文は、〈交換に根差す合理性や体系性や蓄積性を峻拒する「生成する物語」は、どのような意味で「学問」ないし「理論」でありうるのか〉という方法論的な問いに、なお十分に応えているとはいえない。ただし、これらは、本研究の欠陥を示すものではない。これらは、きわめて重要でありかつ個性的でもある問題設定のもと、行き届いた目配りをもって疎漏なく遂行された本研究に、事後的にみいだされる将来的課題であるにすぎないのである。したがって、これらの課題の指摘は、本研究の博士学位論文としての価値をいささかも減ずるものではない。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成19年2月5日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。